

この間の所は、インセンティブ税制と私は言っていますが、自動車税のグリーン化をして、燃費のいい、きれいなエンジンの車に買い換えるようになりました。あれと同じように、社会的に安い所へ住んでくれる人には税金を安くする。中心市街地をきちんと直してくれる地主さんには固定資産税を半額にする。3つ星、4つ星にしまして、半額免除、全額免除とするなどして社会的に畳み込んでいく。

私の研究室では幾つかの地域について計算しております、これは飯田市です。右側が1人当たりの社会的コストです(P.30 資料No.17参照)。総額でいうと都心部が大きいのですが、右側の図を見ますと都心部より周辺部の方が高い。名古屋ももっと真ん中に来たらどうかということをやりますと、実は中心部には7万人、220万のうち3%しか住んでないのです。1割くらいは住んだ方がいいのではないかというシミュレーションをやってみますと、皆さんが中に入ってくれますと不要な交通量が減って、NOxなどの排ガスも減ります。そういうことも計算してみると、外をやめてインフラの投資を放棄しても、計算上十分という結果になっています。実際にはもっときめ細かくやっていかなくてはなりません。

【小出氏】 ありがとうございます。人口が減少するこれからの社会では、そろそろ引っ越しの準備をしないと持たない。それくらいむだな公共投資が行われているという、大変わかりやすいご説明でありました。

続いて谷岡先生と伊藤先生に話していただきたいのですが、谷岡さんにはこれからの成熟社会にふさわしい地域とはどのようなものかについてお話しいただきたいと思います。

【谷岡氏】 風土とよく言われます。国土という言い方もしますが、私は風土という言い方が好きです。風土という言い方をしたときには、土の部分と風の部分があると思うのです。

土の部分は、先ほどそれが実の部分だと申し上げたのですが、人間活動という点で考えてみると風の部分がとても大事なのだらうと。今朝のテレビを見ておりましたら、昨日のキ

ューバとの野球の試合は43.4%の視聴率で、瞬間的には50%以上になった。これだけの人々が夢中になって、街から人影が消えるくらい状況になった。それが人々にとって大事なことからだと思わけてです。

昨日も会う人ごとに「よかった」「よかった」と、お互い何がよかったのか、突き詰めて考えると誰も儲かっていないし、むしろビールで乾杯したらお金が減ってしまうのですけれども、でも「よかったね」といってビールでお祝いしたい気分になる。これが風なのだらうと思います。

私自身20年間、学長として大学づくりをしていて気が付くことなのですから、最初は定員増を行ったり、学部学科の割り振りを変えたり、システムを変えたり組織づくりをやったり、ありとあらゆることをやりました。それは国で言う国土の配置をどうするか、どういう設備をそこに持ってくるかとか、そういうことであらうと思うのです。

ところが、人の動きは風なのだらうと私は思うわけですが、いわゆる校風と言われるものが死語になってしまったのですけれども、大学はやはり学風があるのではないかと。大学に吹いている風というものがあるのではないだらうか。教室で教えることはできるのだけれども、大学生の人格を育てるのは、先輩から後輩へ伝えられ、そこで生活している間に身に付く、ある種のスピリットのようなもの。これが風なのだらう。

地域づくりをすることを考えた場合、見やすいものとしてハードを考えることも重要なのですけれども、そこに営まれ、そして人々の心に風を吹かせる、竜巻を起こす何か、おそらくそれが育むものを私たちは文化と言うのだらうと思います。ですから、いかに空気、風、雰囲気を作っていけるのかを、風土として、土を作る部分と同じくらい大事に考えていかなければいけないのだらうと思います。

【小出氏】 ありがとうございます。私もその意見には大賛成でありまして、国土形成というよりも風土形成の方がいいのではないかと。たとえば「景観」というとなぜか骨っぽい、痩せた言葉だと思えますけれども、「風景」というと、そこに人間の情感が

入り、歴史が入り、いろいろなものが入る。風というのは本当にそのとおりだと思います。

伊藤先生からは、風までくめられた中部らしさといえますか、これからのことをお話ししたいと思います。

【伊藤氏】 先ほど、中部40年を振り返ってみました。では、これから40年先に中部はどんな形になっているのだらうか、という発想をしてみるのも面白いのではないかと思うのです。それが今日の「中部の新しいかたち」という中の一つの考え方ではないでしょうか。

私の専門は地理学です。特に都市地理学で、都市の構造や機能を勉強しています。したがって都市計画とか国土計画の理論というデータづくりみたいところが私の専門で、しょっちゅう地図を描いたり統計資料を分析したりしていますが、中部は40年後にはすごい所になるのではないかと感じております。あまり持ち上げてばかりいてもいけないのかもしれませんが、正直、そんな感じを持ちます。

日本列島を思い浮かべていただきたいのですが、関東平野があり、その前面に東京湾があります。伊勢湾があり、その奥に濃尾平野があり、名古屋があります。もう少し西に行きますと、大阪湾があって、京都、大阪、神戸があります。東京湾から大阪湾まで、わずか600kmなのです。もし日本列島が全然違う形だったら、たとえば東京湾が青森県にあって、伊勢湾が富山県に向かって開いていて、大阪湾が広島あたりにあったとしたら、今の日本の発展はたぶんなかったと思うのです。



しかも、東京湾、大阪湾、伊勢湾とその奥に広大な平野がある。こういうロケーションは外国でもほとんど例がないと思います。その真ん中が伊勢湾と中部なのです。40年前に中部圏計画の初期の頃にお手伝いしたとき、中部圏計画は40～50年経ったら大改定をしなくては行けないだらう、という意見を述べました。そのときに作られる新しい日本列島の図は東京湾と伊勢湾と大阪湾を横につないで一つにくっつけてしまう。そうしますと、日本列島のちょうど真ん中に3大都市が数珠のように並んでいる。ここをどう使っていくかが日本のこれからの姿ではないか。私は中部の可能性に期待して中部圏計画に大賛成して、一生懸命お手伝いをしてきたわけです。

3大湾を横に連ねて、その奥にある3大平野を上手に使いながら、日本を上空から眺めると、その他の地域はたぶん一括りになると思います。その一括りの中に地方都市が点々とあって、それなりの役割を果たしている。つまり日本列島は3つの大都市圏とそれ以外の2つに色分けできる。そういう段階ではたぶん県などという境界はいらない。今ある中央官庁のお役所も大編制をしていただかなければいけない。たぶん40年経つとそんなことが現実になんて近くなるのではないかと。

実は私は東京生まれの東京育ちなのです。箱根から先は異国だと思っていたのですが、三重大学に3年間だけ行ってこいと言われて赴任して、こんないい所が日本にあったのかと思って、定年まで三重大学にいることになってしまったのですけれども、私が東京を離れて三重大学に就職を決めたのは、新幹線があったからです。新幹線ができた年に私は三重大学に赴任したのですが、新幹線がなかったら私は静岡より東京寄りの所で就職口を探していたと思います。

今後40年経ったら新幹線はもう古い。リニア新幹線が走っているべきだと私は思っています。東京から大阪まで60分、名古屋—東京は40分。名古屋—大阪は20分。これは完全な通勤圏内です。そこに3つの湾があって、3大都市がある。この姿は日本の正しい姿ではないか。夢みたいなことを言っているようですが、そのことに私たちは近づきつつあると思っています。そのくらいの図柄を描きながら中部はどうあるべきかという

姿を描くのが、新しい国土形成計画法に基づく中部圏の絵の描き方ではないだろうか。

(3) フリーディスカッション

① 中部の枠組みについて

【小出氏】 ありがとうございます。伊藤先生は東京、須田先生は京都。谷岡先生は大阪でしたね。そこで育った人たちが次々に無条件降伏して、我が名古屋が一番いいと言っていただけ。私は純粋なナゴヤニアンなので、非常に嬉しい感じがいたします。

ここまででは中部における今後の地域づくりの展望と申しますか、こんなような格好になるのではないかという話を伺いました。

ここからはフリーディスカッションで、今回出ましたテーマの中から論じたいと思います。神尾先生から大まかな地域の枠組み、中部5県、愛知県、岐阜県、三重県、静岡県、長野県が中部ではないかと示されました。これは道州制の案の中にもあるわけでございます。この基本は水源を共有する部分をつなげるということになります。川というのは非常に面白いと思うのですが、私は名古屋育ちですから木曾川の水で体細胞が形成されるわけです。転勤して岐阜へ行くと長良川の水で体細胞が形成される。体の隅々まで何となくそんなふうになるという、実に不思議な思いがします。それによる分けと色々な枠組みがありまして、中部とはどこまでなのかという論議はきわめて重大ですが、なかなかまとまらず延々と来ているのが実態であります。

このあたり、「まんなか懇談会」の座長をされています須田先生が一番苦勞された点だと思うのですが、この括り方について大雑把にお願いしたいと思います。

【須田氏】 括り方の議論は今、経済団体でもいろいろ行なわれていますけれども、私はまだ本格的な議論になっていないような気がしてなりません。というのは、中部のように括り方によって地域の作り方がこんなに違う圏域は他にないからです。

北陸地域と一緒にするか東海地域だけかによっても随分違



いますし、どちらがいいかは別として、そういう点をもう少し住民の立場から、市民の立場から議論をしていかないといけないのではないかという気がします。これは非常に重要なことだと思っております。

ただ圏域を決めただけでは問題は解決しないのです。いろいろなものをそれに合わせて、ある県を決めればその県は完全に中部の県でなければいけないのです。たとえば、木曾川の水系から発電される膨大な量の電力は全部関西に行くことになっているのです。中部には来ないのです。関西電力が発電権を持っていかすから、全部関西に行ってしまう。北陸から出てくる、たとえば黒部川水系は全部関西電力に行くわけでありまして、北陸には行かないのです。あれが北陸に行けば、北陸の電力はもっと余ると思います。

だから、今の県ですら人為的なもので舐められているわけです。道州制を作るならそのようなことは許されませんから、分けをする際にその地域に本当に全部備わって、その地域の役に立って、そしてそこで自立することができなければそうはならないと思います。そういうことを考えて圏域を考えていきますと、正直申し上げてなかなか難しゅうございます。そういう議論これから重ねていかないと本当にいい圏域はできないと思います。

今日の話に「国土形成計画への期待」とございますので、一言だけ申し上げておきます。私は、これは陳情の終わりだと思えます。陳情から提案へ、そして、受け身から参画へ。これが大きなポイントだと思います。林先生がお作りいただいた資料の「国土計画制度の改革ポイント」という絵があります。これ

に全国総合開発計画と新しい国土形成計画の比較がございます。全国総合開発計画では国が全国計画を作る、そして、地方の意見を聞く仕組みなしと書いてあります。断言してありますね。すなわち、国が勝手に作るわけですね。地方が用意したものがあから、これの実行の中では陳情しに行かぬばならないわけです。中部国際空港を作るとは書いてなかったわけですから、陳情に行き作られたわけですね。

ところが今度は、全国計画と広域地方計画が書いてあって、真ん中に双方向の矢印が付いています。これが対流なのですね。両方が対流しながら作る。したがって、ここで中部の意見が国の計画にも反映されるし、また国の計画も中部の中に取り込まれていく。ここで陳情の作業は全部終わってしまうのです。もう陳情に行く必要はないわけです。この中には陳情の要素が全部込められているはずなのですね。あとは自主財源を使って自主的にやるだけです。国の援助さえ受けなければどこに飛行場を作ろうと勝手なのです。

そういうものが地方自治だと私は思うのでありまして、まさにこれなのですね。したがって、陳情から提案へ。それから、受け身から参画へ、ということだと思います。それを考えてまいりますと、これから私どもがやらなければいけないことは、先ほど申し上げましたような純粋な圏域をどう作ったらいいかという議論をすると同時に、二度と陳情に行かなくてもいいように計画を作る過程で行うことが大事ではないかと思えます。

ただ、ここから先は雑談ですけども、正直なところJRとしては好ましくありません。陳情に行く人が大変な数でございますからJRは収入を上げさせていただいているわけです。予算が年度を越えて編成されることがときどきありますが、そうなるも暮れのお客様は激減いたします。いかに陳情団が多いかわかるのです。したがって、これがなくなると非常に困るわけですが、対流をする段階でせいぜい乗っていただくということと、陳情に依存するJRではなく、新しい需要を誘発するJRにいたします。陳情をやめてどんどん中部の盛り込んでいただいて、本当の中部を作ることが国土形成計画の期待です。それができなければ国土形成計画の意味がないのです。そ

のようなものにしていただきたいと、私はつくづく感じます。皆様方と一緒に頑張りたいと思います。JRの方は別の面でせいぜいご利用いただければ幸いです。

【小出氏】 ありがとうございます。最初の枠組みからちょっとはずれてしまったのですが、はずれた方が面白いのは常であります。

戻りますけれども、神尾さんに伺いたいのは、中経連は中部5県が自然ではないかとおっしゃいました。問題は北陸3県が加わるかどうか論点だと思うのですが、確かに北陸地域は東海地域となかなか交流がないのが実態です。なぜ北陸地域と東海地域が分かれたかという中部山岳がものすごい障壁になっているからです。これまでの時代は中部山岳を障壁と捉えた圏域ができたのだと思いますけれども、これからの時代は北陸地域を入れることによって、中部山岳がいかに共有財産であるか、あの大自然のすばらしさを分かち合っていかなければならない。北陸と東海地方の人たちが、あれは自分たちの最大の財産だという意識を芽生えさせるためには、北陸を加えた方が未来を見据えているような気がするのですけれども、そのあたりどうでしょうか。

【神尾氏】 車でナビを起動していると、言わなくてもいいのに「三重県に入りました」とか全部案内するのです。だけど、県境があるのかないのか、車に乗っていると全然わからないのです。

東海環状が走り、東海北陸道が走りますと、太平洋と日本海が道路で直結する時代になり、それはすぐそこまで来ています。そうなりますと、中部圏の中に北陸を入れるか入れないかというより、須田先生が進められています広域観光という立場に立った場合には、連携をしないと損であります。北陸側も中部側もお互いに得をする、お互いに恵みを分かち合うという観点に立った場合には、広域連携の力が一番発揮できる所が中部なのではないかと思えます。

それと同時に、東海環状ができて一気に、三重県と岐阜県に、たとえばトヨタ自動車の部品メーカーの工場展開が始まったよ

うに、すでに北陸方面にも自動車部品の会社が工場進出している状況です。その中で、交通インフラが増えてきた場合には、県を越え、地域を越えて連携する時代が来ると思いますから、中部地域の中に北陸圏を入れるか入れないかというよりも、経済面でも、観光の面でも、大いに連携が強まってくる時代であるし、またそうしていった方がよりよい時代になる。互恵の時代だと思います。

②成熟社会における中部の地域づくりについて

【小出氏】 中部の枠組みの問題を始めますと何時間あっても足りないくらいですので、このあたりで止めておきまして、林先生から先ほど出ました成熟社会の問題は少子高齢化が基本なのですが、中部地方に限らず時代の変化という感じがします。

私の取材体験をお話しますと、20年ほど前、少子化が言われていた当時、出生率が1.7の段階で長期連載をしたのですが、少子化は量で捉えられることが多いけれど質の変化も大事ではないかと感じて、「長男時代」という大連載をしました。あの頃から男という男は全部、長男になってしまったのです。もともと日本社会を支えたのは、長男は田舎で親から田んぼをもらって、次男、三男が大都会に行って高度成長を支え、戦後の復興を支えてきた。活力の源はほとんど次男、三男の文化だったわけです。次男、三男は、生まれたとたん、お兄ちゃんというライバルがいるから、非常に活発だし、親が手をかける率、これは聖心女子大が調査をしています、母親が長男に手をかける率は次男、三男の6.2倍というデータがありました。これはおおむね写真の数に比例すると書いてありましたが、それくらいオーバーケアされたのが長男です。次男、三男は面倒を見てもらえなくて、自分が目立つように活発になったり、ぐれたり、勉強したり、いろいろなことをやるわけですが、それが日本社会の活力を生んだ。

その活力源である次男、三男が、恐竜のように絶滅しているのです。長男ばかりになったわけです。6.2倍手をかけられる。これは物理的にそうになってしまうのです。ほくも長男なのです

けれど、長男というのはぼうっとしているのが多い。そういう若者ばかりになった日本民族史上初めての時代なのですね。そういう質的な変化があります。先ほど林先生からも、給料が9%成長だとボーナスと上がる。わかりやすく10%の経済成長だと、7年辛抱すれば倍になります。もし10%の金利の定期預金があれば、7年間で倍になるわけです。でも今、どんなにがんばっても2%でも難しいくらいですけど、2%で成長すると、給料が倍になるためには35年かかるわけです。1%なら70年かかるわけです。だから7年は辛抱できたのです。昔の青年は7年辛抱したら月給が倍になるといってがんばったら、本当に倍になった。でも今は、35年辛抱したら倍になるからがんばれといっても、ちょうど定年のときに倍になるくらいで、がんばる方がおかしいという時代です。そういう社会での地域づくりですね。

もう1つ、質の変化で重要なのは、親類がいなくなるのです。限りなくひとりっ子で、ひとりっ子同士が結婚すると、その間にできた子供にはおじさん、おばさんがいないのです。当然、いともいないわけです。現在、日本社会から急速な勢いで親類ネットワークが消滅しているのです。親類というのは体で覚える知識をいっぱい教えてくれるものですが、それがなくなっている。その代わりになるのは地域しかないと思います。

そのような観点から感じるが多々あるのですが、林先生、成熟社会と地域の問題、特に中部地域はどういう形がいいでしょうか。

【林氏】 私は20年ほど前に、イギリスのリーズに住んでいました。最近爆弾テロの実行犯がリーズ大学の化学の研究者だったというので有名になったところ。その失業率が、国全体が14%、北イングランドが28%というものすごい失業率でした。それから、年齢に応じて24歳以下くらいのところになると、その地域の倍くらいになるのです。つまり50~60%の失業率だったわけです。

しかし、彼らは生き長らえているわけですね。これはどうしてかなと思ったのですが、私が唯一編み出した答えは住宅ストックがきちんとしているからというものでした。つまり、お金を儲け

た世代が次々とその場で、それこそ宵越しの銭は持たないみたいな格好で終わってしまった国と、住宅などのストックをきちんと蓄えていく。この地域は間違いなく先進国の中で最も繁栄しているわけです。日本の中で繁栄しているということは、先進国の中で繁栄しているわけですね。それをどうストックとして残すかということで、この写真にある埼玉県のマンションのようなことをやっけてはいけません。

これは、80年頃に手前の7階建てのマンションができた。10年ちょっとしたら、ここにある2階建てのマンションが5m先にでき



た。これはさいたま市です。大反対していたのだけれど、入ってきた。入ってきた後、数年経ったら10m前に14階建ての計画が持ち上がって、真ん中の住民が訴訟を起しました。つまり、自己中心的にマンションを建てて、自己中心的に入ってきた人がまた次の自己中心的な人を訴えているということですね。こういう切望的なことをやっていたのでは、いくら今の時代にこの地域が繁栄していても次の時代にはめっちゃくちゃになるわけですね。

別に埼玉だけではなくて、名古屋の栄のすぐ横ですが、泉1丁目という所ですが、高い建物の後ろに2階建てがあつたりするわけです。これは自己中心的な精神の固まりですね。自己中心をやめさせるような、あるいは自己中心をやめた方が得をするような仕組みを作らなければならない。例えば、自動車税のグリーン化のように、いいエンジンの車を買うとその方が安いという税制になってないから誰もしないわけでありまして、これも土地利用のグリーン化のようなことをきちんと仕組んでやっけて

だくべきだと思います。

右側の建物がめっちゃくちゃになっています。220万人の人口を持つパリ市です。人口は名古屋の方が少し多い。ただ、パリの面積は名古屋の3分の1しかないのです。

これはきちんと作っているわけです。これが大体200年持っているわけです。200年街区です。パリの場合、ピカピカの建物ではないのだけれども、お互いに調和して生き残れるものが出てきている。

日本は26年に1回建て替えています。マンションなど26年に1回建て替えています。

パリは200年です。経済成長が止まって成熟してきたときに、私たちはどちらの姿で行くかという、中部こそがこういう回転に入っていくという模範になるべきではないか。中部ができなければ日本全体が絶望するわけですね。だから、中部が稼ぎ出しているお金をきちんとストックする。他の地域に貢献することも必要なのですが、中だけでもいい意味での節約型にしていく。これがどうしても必要なことであり、中部にこそできることではないかと思っています。

【小出氏】 全く同感でありまして、私も立場上、知事さんとか市長さんによくお会いするのですが、活気がなくて困っているとか活力はどうしたらだろうという話が必要が出る。そのときに私が反論するのは、ヨーロッパの街を見て誰が活気を感じますか。活気があるかないかで見たら、ヨーロッパの街は全然ないのです。上海やシンガポールに行けば腐るほど活気がある。ヨーロッパにあるのは、静かな落ち着き、文化、奥行きです。世論調査をすると、上海に住みたいという日本人は圧倒的に少なく、ヨーロッパの田舎町に住みたいという人が圧倒的に多い。

成熟社会は間口より奥行き、活気より落ち着きです。次男、三男より長男にはそういうものが好きなタイプが多い。そういう時代の流れだと思います。林先生のご指摘には非常に同感できる感じがします。

谷岡先生、成熟社会と中部地域という観点ではどうでしょうか。

【谷岡氏】 さっき言いました風土で、学校の建物を作ったりするだけではなくて、どうやって風を作るか、学風を作るかというところに専心しましたら、めきめき元気に、活発になりまして、オリンピックで男を相手にしたりとか、かなり活躍をしているわけです。女子大生たちが何を言っているかという、こんなに軟弱な男が多くなって、私たちにふさわしい男が少ないと言うわけです。

落ち着いた景観、落ち着いた街と、それは両立するのだろうか。考えてみるとヨーロッパはその落ち着きの中から歴史を作ってきたわけですね。私たちの世代でいうと大学紛争で、体制を壊して革新を作り出し、新たな力が若者から出てきた時代は、実はソルボンヌから火がついたような気がするわけです。ロンドンの話がさっき出ましたけれども、パンクなど新しいウエーブのロックが生み出されたのは、落ち着き払っているはずのヨーロッパからであることに気がつくのです。それはたぶん、二律背反するものではないのだろう。

何がそれを生み出すのかというと、地縁によるコミュニティ、血縁による親戚関係だけではなく、日本にあったいい伝統である企業社会と呼ばれるものです。今は、会社は働きに行く所になってしまっていますが、会社としての一体感、たとえば実業団チームの応援に皆で行くとか、そういうものが従来はあったと思います。大学も一つのコミュニティだと私は考えていて、学生をお客さんにするのではなく、コミュニティのメンバーとしてどう参画させ、関与させるかということを学風づくりの中で一生懸命考えてきたのですけれども、地縁血縁だけではない、新たな“知縁”、つまり大学で知る縁、それから市民の間で“結びつく縁”というものが、新たな“知縁・結縁”関係として出てくる。

別にゴマをするわけではありませんけれど、トヨタ自動車はこの地域の私たちにとっては一つのモデルであり、目標だと思えます。そこに私たちは何を見ているかという、いろいろな幹部に伺っても同じ答えが返ってくるという、そのアイデンティティです。そして、本当にすごいと思うのは、結束力は強いものだけれども、でも個人がくっつきしている社員が多いという部分です。ここは土だけでなく、風ができています。

私たちの周りには様々な社会がある。土地だけではなく、擬

似かもしれないけれども、そういう“結縁・知縁”を築き上げていく中から未来は見てくるのかなと思っています。

【須田氏】 人口問題について話題が出ているので、気がついたことを一言だけ申し上げたい。これから、国土形成計画でも、あるいは地域のブロック計画でも、人口問題は大変重要な問題になるのですね。それによって計画が変わるものだと思います。

今、少子化対策担当大臣というのがいて一生懸命少子化対策に取り組んでいますが、仮に今から急にたくさん子供が生まれても、その人々が社会的存在になるには20年以上かかるということです。今までで人口構造は決まってしまうわけです。途中で10歳以上の人口を輸入しない限り、同じことですね。

今の人口構造のままでいけば、これからの20年間は社会が構成できないような致命的な問題が起こるのです。それを今から考えようとしたら、私は文化論を整理しておく必要があると思います。そして、インフラ論を整理しておく必要がある。なぜかという、発展途上で増える外国人を、計画的に、かつ文化的に受け入れることを考えなければ、おそらく社会が構成できないのではないかと考えるからです。国内の経済構造なり何なりを少子化の構造に改造することをやりながら、そういうふうな全体的な人口対策、文化的な面とインフラの面で人口対策インフラみたいなものがあるかもしれません。そして、外国人を計画的に上手に受け入れたらどんなことがあるのか。それと新しく生まれた人をどうつなぐのか。これを考えないと破綻が来るのではないと思うのです。

20年後というと、私は確実に生きておりません。皆さんもそれぞれ何歳になるかをお考えいただければ、たぶんお元気でない年代になる方が多いと思うのです。そのことを今から考えておかなければいけないのです。どうもそういう考え方が欠落しておおり、非常に心配です。

【神尾氏】 林先生、谷岡先生が言われたことに対して1つだけ。国土形成とか都市づくりには自由ばかりがあっているのではな

くて、たとえば経済的規制はどんどんはずして自由にしていく必要があると思うのですけれど、社会的規制はもう少し強く締めていかないと、今のようマンションの後ろにマンションができるというようなことになる。

ヨーロッパではどこでも、5階建て以上はダメだとか色はこの色だけだとかやっているように、まちづくりにおいては社会的規制をより強化していく必要があるのではないかと。そうでないと国土交通省さんは何もできないことになってくるのではないかと。思うのです。

【小出氏】 ありがとうございます。最後に伊藤先生お願いします。

【伊藤氏】 今まで議論されている中で感じたことを3つほど言いたいと思います。

1つは、圏域の議論がされています。これについては、道州制を含めて基本的な議論をしなくてはいけないというのはそのとおりなのですが、圏域を安易に引いてしまうのは非常に危険なのです。

昨日、私は大阪にいました。大阪で三重県と和歌山県と奈良県の人と近畿整備局と中部整備局の方々と一緒に席だったのですけれど、そこで議論していたのは紀伊半島についてなのですね。

紀伊半島は、関西と中部の境目であるためにほとんど情報がないし、皆さんも関心を持たない。しかし、紀伊半島を中心に右側に中部、左側に近畿を置いた地図を広げて議論しますと、熊野古道は大変有名になりましたが、紀伊半島は日本の精神文化発祥の地なのです。しかし、そこで何が残っていて、何が問題なのか、ほとんど皆様ご存じないのが現状です。これは中部の問題なのか、近畿の問題なのかというところから始めなければいけないほど、まだ議論されてない。

そういう意味では、圏域をずっと引いてしまうと、多くの場合、圏の縁辺部には人の注意が行かなくなります。人間は社会的動物ですから、帰属意識をもっています。ですから、あなたは中

部の人間ですよと言われると、中部のことには大変関心を持つのですが、その他のことについてはほとんど関心を持たなくなる。それが圏域の縁辺部にもたらず問題なのです。ぜひこのことを十分踏まえながら、これからの圏域づくりをやっていただきたい。これが1つです。

もう1つは、少子高齢化のところで須田先生がおっしゃったので私からは簡単にしますが、私の大学にも中国をはじめとする外国人留学生がたくさん来られています。この人たちが日本の大学で勉強して、大学院まで行くつもりでいるのです。日本の企業に就職したいと言っているのです。しかし、現実にはなかなか就職口がないという問題があります。須田先生がおっしゃったように日本の即戦力が20年経たないと育てないとしたら、その間我々は外国から来る労働者を、特にここはモノづくりですから、モノづくりにはマンパワーが不可欠ですから、それに合致するような人材としてどう育て、社会的に同化させていくか。フランスやドイツのような問題を起こしてはいけないと思っています。そういうための配慮を率先するのは、やはりモノづくりのメッカである中部の役割ではないか。

第3に、そのときにたぶん問題になっていくのは、日本らしさ、日本人としての誇りとか心構えとか心情です。国際化していく過程で日本という国が埋没していつ、消滅してしまうことがないように、文化を土台に据えた地域づくり、国土づくりの精神がこれからの大きな課題だろうと思っています。

コーディネーター総括

【小出氏】 ありがとうございます。

私なりに要約させていただくと、林先生が言われた、この地域は今、最も力を持っている地域である。この地域が日本で一番力を持っているということは、全世界の先進国で一番経



済的な力を持っている地域である。この地域からいろいろなことを始めないと、日本全国が全くダメになってしまうという話を伺って、ほくも全くそうだと思います。

今のヨーロッパ、パリとかロンドンが非常に落ち着いた、微動だにしない街を作れたのも、やはり当時一番力を持っていたからそういうことができた。神尾さんが言われた規制も、貧しい所ではそれができないわけですね。非常に強くなったこの地域で、特に万博の教訓もあることから、新しいモデルができるのではないかというのは、全くそのとおりでという感じがしました。

それから、外国人労働者の話が須田先生と伊藤先生から出ました。全く私も同感です。日本も貧しい頃はブラジルに移民し、満州やモンゴルまで行ったのですが、自分が豊かになったら今度はブラジルの人に来る、中国の人にも来るという、なぜか受け入れる側になかなか同化しようとしません。自分が貧しいときに世話になった国から今、来ているわけですね。こちらの方が豊かになったものだから来るわけです。そういう歴史的経緯を忘れてしまって、外国人の居住者に対するこの国独特のアレルギーがある。やはり、これを除かないと少子高齢化の時代は絶対乗り切れないし、国際都市と言うのですけれども、私の体験では本当の国際都市はニューヨーク、ロンドン、パリです。自分の家の隣に違う国の人が住んでいる、その隣がまた違う国の人で、町内会をやるとミニオリンピックができるくらいいろいろな国の人間が住んでいる都市を国際都市というのであって、東京は隣の人ほとんど日本人ですから、国際色豊かな都市ではあっても決して国際都市ではないと私は思っています。

この地域は、モノづくりで働く外国人がこれから増えると思うのですけれども、そういう人たちと同じ町内を作れるようになったら見事なものです。そういう幅の広さを持ったら、中部は日本屈指の地域になるのではないかという感じがします。

様々なご意見が出ました。様々な先生方のご意見の一つでも皆さんのご記憶に残ればそれで十分かと思います。長時間にわたってありがとうございました。